

語りを観る

— 批評の共有にむけて —

真鍋 昌賢

研究／教育の現場で、DVDなどの映像媒体を手にする機会が年々増えてきている。わたしが関心をもっているジャンル——語り芸——に関して言えば、貴重な名人芸が収録されたDVDを購入し、それを視聴したときに、CDでは気づかなかった身振りなど知り、口演の迫力から新たな触発を得ることがしばしばある。あるいは、講義などの教育の現場において、授業内容を多面的に補ううえで、映像媒体は欠かせないコミュニケーションツールである。研究者と研究対象のあいだを、あるいは教員と学生のあいだを取り持つ手段として、映像はますます身近なものになっていけると言えるだろう。

学問分野を問わず、映像とのつきあい方をどのように自覚するのが議論されて

いる現在、口承文芸研究においても、それは改めて避けられないテーマとなっている。口承文芸研究において、映像媒体は、音声のみの媒体や文字媒体と比べて、どのような性格を抱えた記録だと言えるのか、それはどのような手続きのもとに分析・解釈の対象となりうるのか。さらには、そういった問いのもとに、視聴する映像に対して、どのような観察力・想像力を駆動させていくべきなのかを、今一度議論していくことになるのだろう。

以下では、限定的な範囲ではあるが、プロフェッショナル（専門的）な語り・演奏を収録したDVDのなかから、近年発売されたものを四つ紹介して、若干の見解を述べてみたい。

まず紹介するのは、『瞽女さんの唄が聞

こえる』（構成・演出・伊東喜雄、監修・市川信夫、以下『瞽女さん』）である。本DVDは、高田（上越市）を舞台とした「瞽女さん」の記録映画である。昭和四〇年代に「最後の三人」となった高田瞽女への取材映像・取材音声を中心としながら、近年改めておこなった地域住民へのインタビュー映像などを加えて、全体が構成されている。「瞽女さん」の人生観、生活観、社会組織の特徴などが、暮らしぶりの紹介とともにつづられていく。また「生きた瞽女さん」とのつきあいのなかで、瞽女文化の調査・記録に尽力した市川信次氏の紹介も盛り込まれている。「記録映画」の構成上で重要なのは、「瞽女さん」の芸とともに、彼女たちをとりまく世間が、記録のなかにとりこまれている点である。「瞽女さん」たちが、それ以外の人々と村落社会のなかでどのような関係を結んでいたのが、ナレーションやインタビューのなかで直接的に言及され、また間接的に示唆される。貴重な記録映像を、追加調査をおこなうことにより作

品化した意義は大きいだろう。なお本DVDには、記録映画とは別に、「瞽女唄」が収録されている。

次に紹介するのは、『日向の琵琶盲僧

永田法順』（琵琶盲僧・永田法順を記録する会、以下『琵琶盲僧』）である。本セットは、DVD1枚、CD6枚、CD解説書

写真集で構成されている。写真集は、セット全体の解説書の役割を果たしている。浄満寺住職・永田法順は、撮影時点において、檀家まわりをするただひとりの琵琶盲僧であ

った。九七〇軒の檀家を一年かけてまわるのだという。映像は、永田が檀家を訪れる様子、浄満寺の紹介、調弦の様子、地鎮祭に際して御幣を作成する様子、永田の兄へのインタビュー、永田自身による人生を振り返る語り、檀家へのインタビューなどによって構成されている。そうした映像は、複数の解説が掲載された写真集の添付により補完されている。ここに掲載されているのは、日本音楽史における盲僧琵琶の位置づけ（小島美子）、琵琶盲僧の歴史についての概説（薦田治子）、永田自身の歩み（川

野楠己）などである。写真集からうかがえるのは、永田の記録を残すというプロジェクトが、研究者・テレビ関係者の連携のなかで実現したことである。収録されているCD、DVDに、こうした記録の意図が添えられていることは重要だと思われる。またDVDには、本編以外に「ご祈祷正面映像」が収録されている。

『瞽女さん』『琵琶盲僧』両方に共通するのは、ともに「最後の」という文脈が強調されていることである。語り（声）の魅力

を、映像で記録すべきという意志・熱意に支えられた企画・制作であっただろう。そしてもうひとつ共通しているのは、「瞽女さん」が、あるいは「琵琶盲僧」が、村落のなかで確固たる社会的位置を付与されていたことがうかがえるように全体の構成が工夫されている点である。その一方で、視聴の過程で気づく違いとは、『琵琶盲僧』に比べて『瞽女さん』が相対的に複雑な編集構成になっていることである。『琵琶盲僧』は、永田や檀家を撮影した映像に、ナレーションが重ねられて、撮

影時点での永田の姿、永田へのまなざしがつづられている。『瞽女さん』では、「瞽女さん」自身の映像・写真、瞽女さんの唄をかつて聞いたことがある人々へのインタビュー映像などの素材に、映像とは別に録音された「瞽女さん」への音声インタビュー。さらには、要所要所にナレーション（ときに効果音）が挿入されることにより、記録映画としての全体性がつくられている。

活字情報とのセットで販売されている「語り」の映像化の例を、もうひとつ取り上げてみよう。『講談と評弾―伝統話芸の比較研究』（木越治編）は、舞台での実演とシンポジウムの成果を、書籍+DVDという形式でまとめたものである。映像化は、ドキュメンタリーのみに限られた方法ではない。研究者自身が関わったイベントにおいても、用いられる記録方法である。『講談と評弾』は、金沢大学の「日中無形文化遺産プロジェクト」と「日中講談交流仲間の会」のコラボレー

シヨンによって生まれた成果であるという。書籍部分には、講談・評弾というジャンルの歴史・現状の概要を理解するための論文・インタビューが掲載されている。DVDの内容は「講談入門」、「日本の講談」、「中国の講談（評話と弾詞）」から成り立っており、また「講談入門」「中国の講談」の一部分には、中国の講釈場の様子、評弾学校の様子が映像として挿入されている。本DVDの目玉は、まずもって「評話」「弾詞」の収録だと言えるだろう。また本書では、DVDに収められた実演が実現するまでの経緯が詳細に追われている。研究者と日中の演者による交流の積み重ねの記録は、補足的な情報に思えるかもしれないが、実際には、収録と出版の意義を説得的に示すうえで、効果的に機能していると思われる。先の『琵琶盲僧』と同様、解説によって、制作の意図が一層明確に伝わることになり、より多面的な作品批評・検証が可能になる。

一方で、少々残念だったのは、日本の講談のうちいくつかの演目において部分的

な省略がなされていたことである。書籍で演目（演者）の紹介を掲載してもよかつたように思われた。演目の解説が書籍本文に入るにより、一層活字と映像の結びつきが演出されたのではないか。演者のレパートリー紹介・演目の紹介などの説明を媒介して、講談界の現状への言及をさらに展開することも可能であったのではないかとも思われる。

寄席芸から、もうひとつDVDを紹介しておきたい。『浪曲三味線 沢村豊子の世界』は、浪曲師（語り手）・国本武春の進行により、曲師（伴奏者）・沢村豊子による三味線奏法が紹介されていく。曲師入門を意図した作品である。ワイプ、クロージャップなどの映像技法を用いて、沢村

の奏法を見せることに重点をおいた構成になっている。浪曲界では、曲師不足が問題となつて久しい。これまでマスメディアにおいて、曲師にスポットがあたる機会には、浪曲師に比べて圧倒的に少なかった。浪曲研究においても、曲師の演奏については、まだ本格的にとりあげられたことがな

いといつていい。いわゆる記録映像ではないのだが、語り芸における盛り上げりの文法を、音曲の側面から考える上で、さらには口演の場のなかの声を、それを支える仕掛けから考えるうえで、様々なきっかけが得られるように思われる。曲師の世界への誘いを目的としつつ、三味線伴奏を經由した浪曲への興味喚起がねらわれていると言つていいだろう。なお本DVDには、特典映像として国本武春「紺屋高尾」が収録されているが、こちらは一席通して、沢村豊子の演奏を映し出しており、表舞台で口演する国本武春が小さなワイプのなかで映される。これまでの浪曲を収録したビデオ・DVDにはなかった新しい試みである。

以上、個人的な関心からではあるが、現在購入可能であるDVDを四つ紹介してきた。最後に全体を見渡して、批評のポイントという点から、いくつか見解を述べておきたい。

一つ目は、作品が編集の末にパッケージ化された表象であることへの配慮が、

どのように解説・注釈として盛り込まれているかという点である。制作の意図、収録内容の構成意図、発売に至る経緯、収録できなかった要素などが、活字において、バランスよく言及されることが、記録映像が積極的に批評に開かれていく前提になると考えられる。そうした活字による解説は、制作の意図を超えて映り込んでくる物・人・現象への鋭敏な観察を、視聴者の側に呼び込んでいくためにも重要である。

二つ目は、どのような編集技法のもとに、全体が構成されているのかという点である。音声のみのCDとは異なり、DVDの場合、視覚的要素・聴覚的要素による輻射した情報提示を、受容者は受け止めることになる。画面構成において、クローズアップがどのようにつなわれているのか、ショットがどのようにつながっているのかなど、画面上の構成についての批評がなされていく必要がある。映像が商品として編集されていくとき、わかりやすさが追求され、それにともない捨てざるおえない情

報がでてくる。編集技法への想像力を、かにはたらかせるかが求められてくるだろう。

三つ目は、声による語りとそれ以外の要素との関係性が、どのように提示されているか、という点である。これは、口承文芸研究の視野から提起される批評のポイントだと言えらるだろう。まず何よりも、語りの技術や、語り手と語りの場の関係などについて

の非言語的な情報を、映像から読み取れる可能性があるという点は、CDとは異なる特徴である。身体の一部としての声の位相、場の一部としての声の位相が、効果的に可視化されることにより、解釈を深化させる可能性が秘められている。

三つ目のポイントは、二つ目のポイントと密接に関係している。つまり、画面から聞こえてくる声による語りの位相を読み解くことは、それがナレーション、スーパーインポーズ、BGMあるいは被写体の動きなどとのからまりあいによる広義の「語り」のなかに埋め込まれていることを、読み解くことでもあるからだ。媒体への自

覚が求められる点は、CD・書籍も変わりが無い。忘れてはならないのは、CD・書籍とはまた異なるタイプの複雑さ・なめらかさが、映像媒体のなかで演出されていることである。言語情報・非言語情報がさりげなく結合するなかで、映像そのものが、意味の不安定さをかかえつつ、つねに理解と誤解の境界にただよっている。

まさにそうした映像媒体の特徴への議論をもとに、批評のポイントを蓄積・共有・検討していく協働過程こそが、語りを視聴する技術を錬磨するうえで、欠かせないのである。

『瞽女さんの唄が聞こえる』(有)地球村、税込三九九〇円

『日向の琵琶盲僧 永田法順』(株)アド・アポロ、税込二二〇〇〇円

『講談と評弾―伝統話芸の比較研究』木越

治編 八木書店、税込三七八〇円

『浪曲三味線 沢村豊子の世界』武春堂

税込三〇〇〇円

(まなべ・まさよし)北九州市立大学